



Title	ゲーテのイタリア旅行前後：「古典主義」の生成をめぐって
Author(s)	林, 正則
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41087
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	はやし まさ のり 林 正 則
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 4 7 9 8 号
学 位 授 与 年 月 日	平成11年 3 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 名	ゲーテのイタリア旅行前後 ——「古典主義」の生成をめぐる——
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 中村 元保 (副査) 教 授 石田 久 教 授 柏木 隆雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ゲーテにおける「古典主義」の生成と意義を、彼のイタリア旅行前後の時代に焦点を合わせて解明しようと試みたもので、4部11章からなっている。

まず第1部では、イタリア旅行におけるゲーテの自然体験、芸術体験に即してその成果が検証される。第1章では『旅日記』の言語表現が検討され、第2章ではイタリアにおけるパラディオ建築の体験を通して、第3章ではシチリアの旅を辿ることで、ゲーテの「アウトノミー美学」の成立が明らかにされている。

続く第2部では、イタリアからヴァイマルに帰国した直後に書かれた作品の検討を通して、ゲーテの「古典主義」的な象徴理論の生成と意義が論じられる。第1章では、『自然の単純な模倣、手法、様式』、『ローマの劇場で男性によって演じられる女性の役割』、『造形芸術の理論のために、建築、造形芸術の素材』の3つの美学論文が取り上げられ、ゲーテにおける「様式」概念、「象徴」概念の成立が跡づけられる。第2章では、『ローマのカーニヴァル』の分析を通じて、ゲーテがイタリアで掴み取った知覚と言語表現の新たな可能性が明らかにされている。そして第3章では、ゲーテの最初のモルフォロジー（形態学）関係の論文『植物のメタモルフォーゼを説明する試み』の詳細な文体分析によって、ここでは植物個体に現れる自然の生命力が単に外側から写實的に描写されているのではなく、いわば内側から体験され、その内的な体験がテキストの中に具体的な姿を得ている様相が検証される。

第3部では、色彩研究を取り上げ、ニュートンとの苛烈な対決を通じてゲーテが守ろうとしたものは何かを問い、それが彼の「古典主義」とどのように関わっていたのかが究明される。まず第1章では、ゲーテが有機体の生命活動に見た収縮と拡張、求心力と遠心力といった「両極性」の概念を彼がどのように色彩という物理的自然の理解に適用しようとしたのかが検討され、さらに、彼が導き出した独自の色彩円を経て、それが古典主義的な「全体性」の理念へと結実してゆく過程が明らかにされている。第2章では、『色彩論』3部作の第3部『歴史篇』が取り上げられ、それがいわば「人間の精神のモルフォロジー」として構想されたものであることが論じられている。第3章では、革命時代のゲーテを理解するキーワードの一つと言ってよい「社交」の概念に焦点を合わせ、それが彼の自然研究の根底に存在する「全体性」の理念と不可分であること、また「社交」の概念がゲーテにおける自己形成の問題と深く関わっていることが指摘される。

第4部の第1章では、ゲーテの自然科学、特にモルフォロジーの記述言語とFr. シュレーゲルに代表されるローマン派の芸術批評の言語表現を具体的なテキストの分析を通じて比較検討し、両者の接点と分岐点が究明されている。

第2章では、『色彩論』の成立過程におけるシラーの関与を通して、対蹠的な資質にもかかわらず、彼らがともに自然の「全体性」を目指していたという点で、そこには相互理解の可能性と豊かな生産性が約束されていたことが明らかにされている。

こうした論述を通じて本論文は、ゲーテの「古典主義」が「静謐な調和的な美」に安住することではなく、むしろダイナミックな生命の運動そのものの表現であったと結論づけている。

A 4 判 (1200字) × 192 頁 (400字詰原稿用紙換算576枚)

内訳：本文168頁 (同504枚)、目次・注・文献24頁 (同62枚)

論文審査の結果の要旨

「ドイツ古典主義」という概念は、文学史の一時代を表す歴史的な概念であると同時に、規範性を色濃く帯びた概念でもある。1970年代以降高まったゲーテ批判・「古典主義」批判は、「ドイツ古典主義」概念をめぐる歴史性と規範性の曖昧な混淆に、ある種のいかわしさを嗅ぎつけたものであった。本論文も同じ意味で、19世紀にドイツ文学史の基軸概念として著しく規範性を強めた「ドイツ古典主義」の[・]_・を洗い落とし、そこからゲーテの「古典性」の本来の姿を救い出すことこそ、ゲーテ研究の真の課題であるとするところから出発している。しかしその際、本論文があくまでもゲーテの作品に即し、その具体的な言語表現（文体）の緻密な分析を通して、ゲーテにおける「見ること（知覚）」と「書くこと（言語表現）」、対象と言葉の関係を問い直し、ゲーテの「象徴」が含意する「全体性」の理念に迫ろうとしている点は独創的な試みである。

そうした試みがもっともめざましい成果を挙げているのは、『植物のメタモルフォーゼを説明する試み』の文体分析である。これまで、ゲーテの自然科学論文はその理論的内容が問題とされることはあっても、その言語表現が問われることは皆無であったと言ってよい。しかし本論文は、現象を記述するゲーテの言語表現の特異性にこそ、彼の自然科学を解く鍵があるとし、その文体の詳細な分析によって彼の「古典主義」的な象徴思考のあり方を解き明かしている。

ただし、ゲーテという研究対象の大きさ故に、触れられなかった問題も多い。本論文が主に自然と言語との関わりを中心に据えているためとは言え、『イフィゲーニエ』、『タッソー』、『ヴィルヘルム・マイスター』、『ファウスト』など、ゲーテのいわゆる「古典主義」期の文学作品に当てられた部分が少ないのは、ゲーテの「古典主義」を論じた研究としてはややもの足りない印象を与えるかもしれない。

しかし、言語表現の具体的な細部にこだわり続けた姿勢、とりわけ従来顧みられることのなかった自然科学論文における言語表現の重要性の指摘は、今後のゲーテ研究に貴重な一石を投じたものと言える。よって本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。